

一九六八年の

新年を迎える

年が明けると、子どもたちは急に成長したような気がする。年が新たになって急に変化するはずもないのだが、年長組の子どもは、あと二か月余りで、幼稚園から姿を消し、小学校にいつてしまうのだという実感が湧いてくる。私立の幼稚園では、新年度に入園する子どももきまっています、何となく、後から順ぐりに押し寄せ、押し出されていくようなあわただしさも感ずる。幼稚園にとつては、毎年のように迎える新年であるが、ひとりひとりの子どもにとつては、これで最後の数か月の幼稚園の残りの生活、かけがえのない貴重な月日である。幼児の成長は何と早いものであろう。四月には、困った、困ったといっていたことが、今ごろには、もう困らなくなってしまうている。これは何かしなければと思つていたことを、いつのまにか、子どもの方で、ちゃんとやってくれるようになっていく。なにも、目を三角にしてむきにならなくてもよかつたものと、悔まれることもいろいろと思ひ出されるであらう。

幼児は成長していくのである。ひとりひとりが、自分のペースで成長していくのである。いま、おとなの思う通りにならなくとも、幼児の中には、もつとたいせつなものが育ちつつある。幼児期には、幼児期でなければ育てることのできない、やわらかい芽がある。かけがえのない楽しい時期である。大急ぎで、かけ足で、この時期を通り過ぎさせてしまわないように、じっくりと、とりくんでいくようにしよう。

もうじき、小学校にいくのだから、そのときに困らないように、あれも、これもしなければと考え過ぎてしまわぬように。小学校にいくようになれば、子どもは、そのときに必要なことを、りっぱにやりとげる力を持っている。いま、やらなければならぬこと——幼児らしさを見出し、それを十分に伸ばすこと。

一九六八年は、ひとりひとりの幼児にとつて、役に立つ幼稚園が、全国にひろがっていくように。本誌が、ひとりひとりの幼児の幸福につながっていきけるように願っている。それに付いても、一クラスの幼児数、四〇名は多すぎる。一クラスの幼児数を減少させることを、折にふれ、時にふれて、強調したい。

幼児の教育 第六十七巻第一号

一月号 © 定価八〇円

昭和四十二年十二月二十五日印刷
昭和四十三年 一月 一日発行

東京都文京区大塚二ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚二ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一
印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
フレーベル館にお願いたします